

第4章 シンクタンク

シンクタンク活動は人と自然の博物館を特徴づける重要な機能の一つとなっている。ひとはくのシンクタンクには一般に想起される行政シンクタンクだけでなく、市民団体や地域活動を対象としたコミュニティ・シンクタンクも含まれる。行政シンクタンクでは平成17年以降、年間250～300件の委員会に参画しているほか、行政や企業からの委託研究を年間で10～20件のペースで受けている。行政シンクタンクの内容は多岐にわたり、獣害対策から発展して森林動物研究センターの設立を支援したもの、外来生物対策、世界的事業である地球規模生物多様性情報機構への標本状況の提供、生物多様性地域戦略策定支援などがある。

1. 博物館のシンクタンクとは？

1) 博物館がシンクタンク活動を求められる社会背景

生物多様性に関連する世界的潮流は、1992年のブラジル・リオデジャネイロで開催された「環境と開発に関する国際連合会議（地球サミット）」での生物多様性条約の採択から活発化し、締約国会議が回を重ねる度に深化している。日本でも1995年に初の生物多様性国家戦略が策定され、以後3回の改訂が行われたほか、自然再生推進法、外来生物法、カルタヘナ法、生物多様性基本法などの関連法が制定されてきた。地方自治体においても、千葉県、埼玉県をはじめ、多数の都道府県・市町村が地域戦略の策定を進められ、生物多様性民間参画ガイドライン（環境省 2009）や生物多様性地域戦略策定の手引き（環境省 2009）の公表、生物多様性保全活動促進法の制定（2010年）などが制度の整備も進んでいる。

一方で、生物多様性という言葉が指し示す事象は多岐にわたり、単純化してとらえにくいこと、一般に馴染みのある言葉としては受け入れられていない。内閣府の調べでは2009年6月時点での国内での認知度は36.4%と低かった（内閣府大臣官房政府広報室、環境問題に関する世論調査 <http://www8.cao.go.jp/survey/h21/h21-kankyoku/index.html> 2010年7月4日参照）。しかし、2010年には愛知県名古屋市における第10回生物多様性条約締約国会議（CBD-COP10）が開催され、生物多様性の課題がかつてないほどに注目された。今後も生物多様性への取り組みを継続・発展させるためには、それを長期的に支援する体制を整えることが必要であろう。特に、多様な生物の営みを保全し、伝統的な文化と新しい発想に基づき、生物やそれらの営みから得られる恵みを末永く享受してゆくためには、地域におけるシンクタンク活動を担う組織の存在が重要となる。これは、2010年12月に成立した生物多様性保全活動促進法におい

て、地方公共団体で地域連携保全活動支援センターの体制を整備することが推奨されている（第13条）点からも窺うことが出来る。ここでいうセンターに求められる役割とは、地域の生物多様性のあるべき姿を示し、それを実現するための課題を抽出するとともに、その解決方法を様々な主体との協働により提示する事である。また、抽出された課題を解決するための活動が実践されるよう、社会制度を整えるとともに、解決のための事業を担う人材や組織を発掘、または養成する必要もある。地域の自然・環境・文化について調査・研究を進め、情報を蓄積してきた地方博物館に対し、地域の生物多様性に関する様々な相談事に対応するシンクタンクとしての役割が強く求められている。

2) シンクタンクの目的

ひとはくのシンクタンクの最終目的は、ひとはくの理念である「地域を愛する心を育み、地域の自然・環境・文化を未来へ継承する」の実現に貢献することにある。

この最終目的を達成するためには、科学的思考力を持った研究員が博物館で蓄積された資料・研究成果を活用し、地域住民とともに地域の自然・環境・文化に関する現状の把握、課題抽出、目標設定を行うことが必要である。また設定した目標を実現するための技術、手法の開発や担い手（個人、団体、企業、行政など）を養成し、その活動を支援することも必要である。このことからシンクタンク活動の直近の目的は、(1) 科学的知見に基づいた現状分析・課題抽出・理想や目標などの社会提言、(2) 理想や目標の実現のための技術・手法の開発、(3) 担い手の活動支援の3点に集約される。

3) 民間シンクタンクとの違い

広辞苑第六版によれば、シンクタンクとは「さまざまな領域の専門家を集めて政策や企業戦略の策定・提言などを行う調査研究組織。頭脳集団。」と定義されている。行政や企業を対象として活動する色彩が強い言葉であるが、生物多様性に関わる現場では、顧客に占める市民や市民団体・学校団体

の割合も高く、そのシンクタンク活動の恩恵の受け手は幅広い。ひとはくが扱うのは、言葉の定義より幅広い対象に向けて、地方博物館が実践しているシンクタンク活動である。

また、民間シンクタンクは、行政課題や社会問題を解決することを目的として、主に行政機関を顧客とした取り組みを中心としている。それに対して、ひとはくのシンクタンクは、民間シンクタンクの目的・顧客に加えて、自治体レベルの小さな地域課題の課題解決も目的として、地域コミュニティや市民団体をも顧客とする点が特徴である。

4) シンクタンク活動の類型

博物館に持ち込まれる課題は、個別的なものから公共性の高い事業まで社会性の幅は広い。また、すでに事例が豊富で情報が多く得られるものからまったく知見がないものまで難易度に高低がある。そのため、状況に応じてシンクタンク活動の形態は変化する。博物館の主なシンクタンク活動は図4-1のように類型が可能であり、以下に個々の活動について整理する。

(1) 質問対応

質問対応は博物館での最も初歩的なシンクタンク活動である。その形態は電話や手紙、メール、来館による面談など様々であり、市民、行政、企業の利用者の区別なく件数も多い。ひとはくでは年間1000件以上の質問(図4-2)に対応している。質問者は確かな答えが示されることを望んでいる。しかし、生物多様性の課題の多くは、未解明のものを含むほか、たとえば保全事例が豊富な生物種であっても生育地が異なると既存の対策では保全が難しい場合があるように、画一的な知識、手法を提示するだけでは生物多様性の課題の解決が困難となることも多い。質問対応における適切なシンクタンク活動には「どこまでわかっている、どこからがわかっていないか」をきちんと提示する事が必要である。

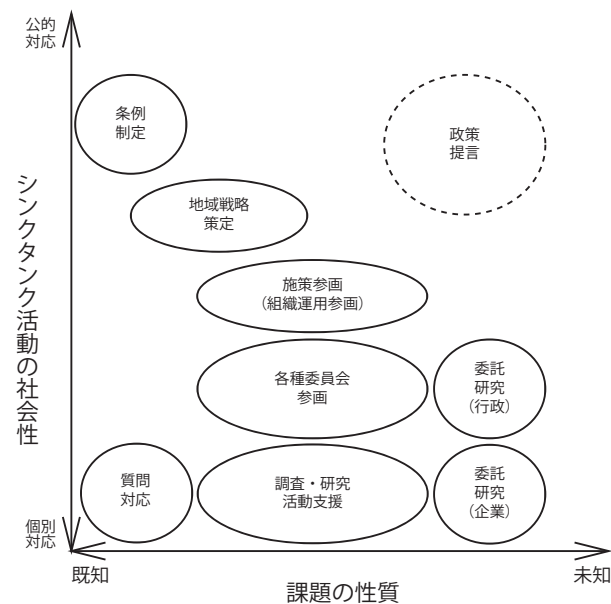


図4-1 博物館のシンクタンク活動の類型

(2) 委員会への参画

各種委員会への参画は行政機関に対するシンクタンク活動の中心となる。その内容は開発行為に伴う環境影響評価や河川改修工事に伴う希少種の保全対策のあり方といったものから、都市の公園利用計画、里山林の整備の進捗状況の評価・改善策の提言、生物多様性地域戦略の策定など多岐にわたる。ひとはくは1992年の開館準備当初よりシンクタンクの実践を博物館の主要機能として位置づけており、年間約300件の委員会に参画している(図4-3)。委員会の参画によって、館独自の調査は得られない自然環境情報が入手できることや社会学や工学など自然史以外の様々な分野との交流が生まれること、市民と行政の間を取り持つことができるなど、委員会の機能と博物館機能との相乗効果によって、より有効なシンクタンク活動を実践することが期待できる。

(3) 課題研究の受託

行政や企業から博物館に持ちかけられる相談事には解明されていない課題も多く含まれる。即答は出来ないが調査を実施すれば解決策を提示できる可能性がある場合、課題研究として委託されることがある。例えば、2009年度に受託した研究には、絶滅危惧植物の栽培や増殖、工場敷地内におけるビオトープ創出技術の開発、住民参画型公園運営のあり方、パークマネジメントにおける人材養成手法などがあり、その内容は多岐にわたっている(詳細は第4章2-3を参照)。このような委託は一過性のものではなく、ひとはくでは年間15件程度(図4-4)の研究を受託している。

(4) 調査・研究の支援

地域の生物相の現状や経年変化を把握したり、希少種の保全の取り組みにあたってモニタリングを実施したりすることは、生物多様性の理解や保全に不可欠である。このような相談事に対しては、ひとはくでは「答えを探す手法や理解する

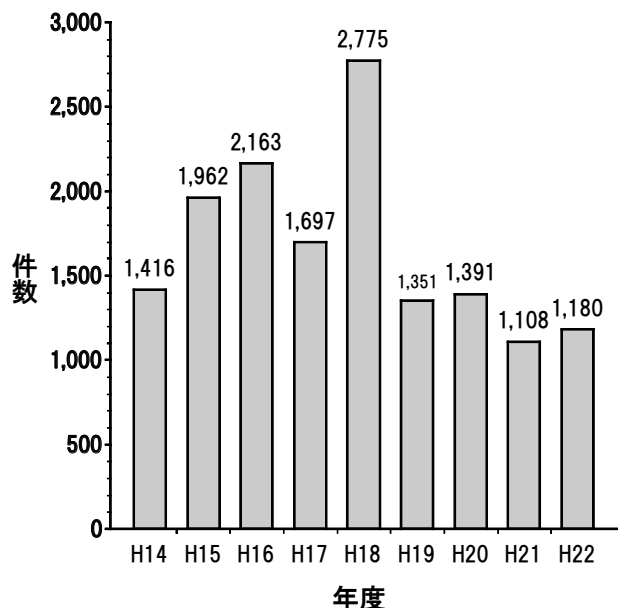


図4-2 兵庫県立人と自然の博物館における年間の質問対応件数

ための道筋を提示する」ことで対応する場合がある。例えば、リサーチプロジェクトの企画や、地域研究員・ひとはく連携活動グループの研究活動の支援がこれに当たる。このように、「技」「思考方法」を地域や支援対象など現場の実情に合わせて最適化し提供するように努めている。

(5) 社会制度の整備

これは地方自治体の生物多様性施策のとりまとめなど生物多様性に関わる社会の仕組みの整備に、博物館が貢献する活動が該当する。その1つの例が、生物多様性地域戦略の策定に関わるシンクタンクである。ひとはくでは、館内で生物多様性行政に対する支援チームを結成し、生物多様性ひょうご戦略策定の委員会の事務局を県自然環境課と共同で担ったほか、戦略の起草に多くの研究員が関わった（兵庫県（編）

2009）。生物多様性地域戦略は平成19年度に施行された生物多様性基本法によって法定計画として位置づけられ、その社会的地位は以前よりも増している。このような生物多様性地域戦略の策定に博物館が関わることは生物多様性の保全と持続可能な利用の実現にむけて、生態学の知見を社会に反映させる方法として有効と思われる。

(6) 生物多様性施策への参画

行政施策が効果的に実行されるためには、博物館などの専門機関に所属する人材が施策運用に参画することが望ましい。ひとはくでは、生物多様性ひょうご戦略の推進を担う「生物多様性支援拠点」の役割が期待されている。

5) これから求められるシンクタンク

生物多様性シンクタンク活動を概観すると、生物多様性に関するシンクタンクに求められる機能と、博物館の通常業務との間に強い関係があることがわかる。

博物館は、地域の自然環境情報を資料収集・整理活動を通じて蓄積するとともに、地域の生物多様性を多面的かつ継続的に調査・研究している。その成果は、研究員・学芸員によ

る普及・啓発活動に用いられることで、一目ではわかりにくい生物多様性の本質や価値、あるいは地域の生物多様性のありべき姿を理解し考えるための情報として広く社会に提供される。また博物館は、様々な行事を通じて、子どもから高齢者までの幅広い世代や、市民から企業、行政までの多様な属性をもつ主体と接する機会に恵まれている。このことは、生物多様性に関わる人材や組織の発掘・養成をする上で、大学や専門研究所などの他機関と比べ優位な立場にある。

さらに、セミナーや研修会などの普及啓発事業を通じて、野外における生物多様性保全を実践するなど、シンクタンクとして提案した活動を実現する場所や機会も有している。

以上を考慮すると、博物館は、その基本機能である資料収集・蓄積・整理、調査・研究活動、学習支援活動を通じて、地域の生物多様性の保全や利活用の取り組みを支援できる社会施設といえる。この有効性に加え、博物館には、地方行政組織における環境リテラシーを有する専門家集団としての役割も期待されており（佐久間 2010）、博物館がシンクタンク活動に積極的に取り組む意義は大きい。

ただ、その活動のあり方は、現状では社会からの要請を受けて対応しているものが大半である。博物館の生物多様性シンクタンク機能についての社会的認知をより一層広めるためには、要請対応型の対応だけでは不十分といえる。図1の博物館のシンクタンク活動の類型を見たとき、未知の課題でかつ公的対応となる活動要素が欠落していることがわかる。今後はこの空白部分を担うシンクタンク活動、たとえば、生物多様性の専門機関として、生物多様性の保全と持続可能な利用が確立される社会の理想像と実践方策を調査・研究成果や豊富な資料に基づいて提示するような政策提言など、社会に積極的に働きかけるシンクタンクの実践が不可欠と考えられる。

文献

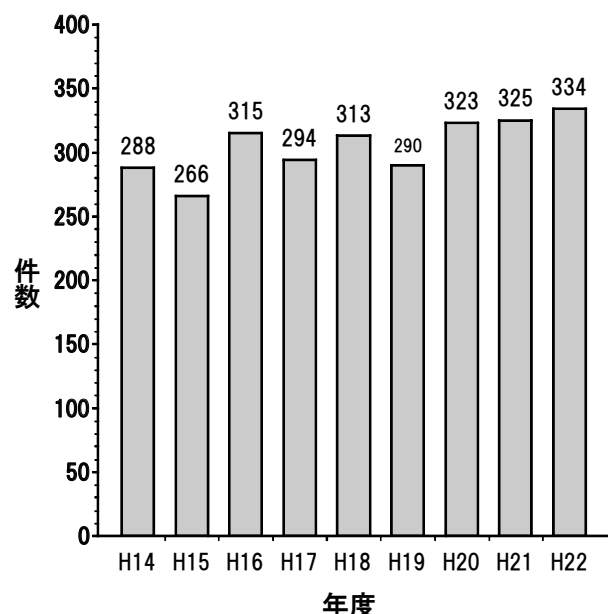


図 4-3 兵庫県立人と自然の博物館における年間の委員会参画数

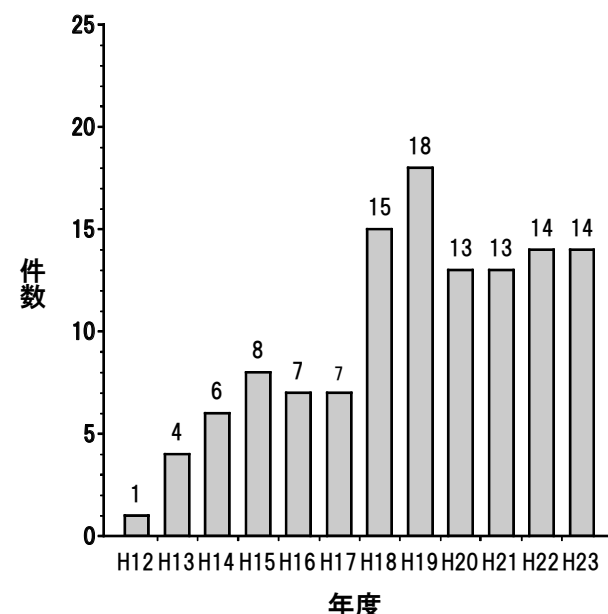


図 4-4 兵庫県立人と自然の博物館における年間の受託研究件数

時代に先行した取り組みであったといえる。

保全生物学・保全生態学という学際分野がでてきたものこのころである。ジーンバンク機能はまさにこの分野であり、この新しい研究分野は応用という側面を持つため、多方面の基礎研究の学際的協力が必要である。ひととはくでは、自然・環境再生研究部を設けて、植物生態学、植物社会学、植物分類学、植物生理学、環境教育論などの専門家を配して、植物・植生の保全を目的として、絶滅危惧植物などの緊急避難、危険回避、増殖、種子保存、自生地の保全などに取り組んで来た。

(黒田有寿茂・鈴木 武)

自然環境モノグラフの編纂開始

特定の生物や環境について、県内全体の分布・生育状況などのデータをまとめた冊子はその分野の研究者や研究家が重宝するだけでなく、行政、環境学習等への活用もしやすくなり、データバンクの公開として重要な手法である。

「兵庫県維管束植物目録」は、1999年から2009年まで11回に分けて、和文紀要「人と自然」に掲載された。これでは、標本情報から、兵庫県に自生するシダ植物、裸子植物、被子植物の全種の分布を公開したが、2004年からは「自然環境モノグラフ」としてさまざまな生物の分布・分布情報の出版を行っている。

2004年3月 第1号「兵庫県におけるハバチ類の種多様性」 内藤親彦（編著）

内藤氏は神戸大学農学部教授で、幼虫が植物を食べるハバチ類の専門家で、兵庫県内の分布するハバチ類の写真および分布データを保有。博物館のデータバンクに情報を登録するとともに、モノグラフとして発行した。

2006年3月 第2号「兵庫県における鳥類の分布と変遷」 日本野鳥の会兵庫県支部（編著） 江崎保男（監修）

日本野鳥の会兵庫県支部会員などがもつ鳥類の観察記録を元に、1994年以前と1995年以後に分けて図示したもの。前年度にデータ提供を受けて、データバンクに登録したデータから作成した。

2007年3月 第3号「兵庫県における大・中型野生動物の 生息状況と人との軋轢の現状」人と自然の博物館 自然・環境 マネジメント研究部（編集）

2007年4月に開設した県立森林動物研究センターの準備室は人と自然の博物館内で活動し、ひととはく研究員の数名が兼務をして、野生動物の保全と管理の体制づくりを行ってきた、その課程で、県内の農家・狩猟者から現場の情報を元に、クマ、シカ、イノシシ、アライグマなどの生息情報と被害の現状などをまとめた

2008年3月 第4号「兵庫県の淡水魚」兵庫県陸水生物研究会（編集）

博物館準備室時からの調査委託によるデータ、行政が行った調査、既存文献、市民団体の調査などをもとに河川、ため池などに生育する淡水魚の分布データ、分布図をまとめた。

(佐藤裕司)

有馬富士公園開設

有馬富士公園はひととはくから北東へ約4kmの位置にある都市公園で、計画面積が416.3haと県内最大の面積である。県立公園としての有馬富士公園と三田市立施設としての有馬富士自然学習センターが共同で運営している。

近隣の県立施設だったこともあり、ひととはくは1999（平成13）年の有馬富士公園運営計画策定が始まったところから1）住民参加による運営プログラムの形成、2）里山管理の実践、3）展示の作成と運用などの点で協力を行って来ている。

1）については環境計画研究部（当時）が主に関わっており、他研究部も含めて、2000（平成14）年からの有馬富士公園運営・計画協議会に加わり、シンクタンクとして運営に関わって来た。2001（平成15）年の開園に向けて、さまざまな市民団体との対話のコーディネートが続けてきている。その結果、「夢プログラム」など住民グループによる自主企画・運営プログラムのしくみが形成されて、継続している。大学生などから構成された「がきっこくらぶ」とも協力して、2002（平成16）年増設の遊びの王国のコンセプトの形成、レイアウト、運用に関与してきた。

その後も2008（平成20）年の全国育樹祭、2009（平成21）年の休養ゾーンの増設などにあたってノウハウの提供などシンクタンクとしての機能を行った。今後に向けて、どのように住民参加の継続を続けるのか、次世代を担う若者（高校生、大学生など）の参加を促すかなどどの公園でも起きている課題解決へ模索している、

2）については、生物資源研究部（当時）が主に関係して、開設当時から、里山としての有馬富士公園の森林の維持管理の方法に研究を行い、三田方式の里山管理を提案・実践してきている。

3）については、2001（平成15）年時の若手研究員が主になって、三田市立有馬富士学習センターの展示物の構成やレプリカ類の検収など博物館の運営に関わった経験のある者ならではのノウハウの協力を行った。大型のミヤマクワガタ模型の通称「つよし君」はひととはくの昆虫担当者の名前といわれている。

(鈴木 武)

淡路景観園芸学校設立

淡路景観園芸学校は、景観・園芸分野の実践的専門教育を徳著とする県立教育研究機関で、1999（平成11）年4月に開校した。ひととはく研究員の約2/3が属する兵庫県立大学自然・環境科学研究所の第2番目の系（景観園芸系；現在は専門大学院として独立）としても関係の深い機関である。

1993（平成5）年ころから、園芸の盛んな淡路の地に園芸学校をつくり、関西空港の土砂取場であった淡路北部の地の森林再生を目指すとともに、国際花と緑の博覧会（フローラ2000）の開催の計画が県土整備部で進んでいた。

1995（平成7）年から淡路園芸学校（仮称）開設準備委

員会が開かれ、中瀬部長（当時）が委員として活動し、環境計画研究部（当時）が開設に向けた協力を行った。開校後もひとはくでの見学時の講義などでの協力をするとともに、ひとはくから園芸学校に異動した職員も数名いる。

2000（平成12）年3月18日から9月17日に淡路町・東浦町（当時）で開催されたジャパンフローラ2000（淡路町・東浦町）にもひとはく研究員は様々な支援を行った。その中でも大きいのは、ラフレシア、オラウータンなどのボルネオのジャングルに関する展示である。ひとはくは1997（平成9）年からマレーシア国立サバ大学と学術協定を結んで、研究・展示、普及教育活動などを行ってきた。この流れの一環として、ラフレシアの採集から樹脂封入標本の作成やオラウータンはく製の貸与も可能となった（現在では、ひとはく1Fの共生の森の展示として活用されている）。

（鈴木 武）

コウノトリの郷公園設立

1965（昭和40）年から豊岡市で兵庫県教育委員会により「コウノトリ保護増殖センター」が設置され、25年後の1989（平成元）年についてヒナが誕生し、その後順調に増殖が行われて来た。ひとはくが開館した1992（平成4）年から、コウノトリ将来構想検討委員会が設置され、コウノトリの野生復帰計画が始まった。

コウノトリの野生復帰には鳥類の専門家だけでなく、生育環境としての魚類等も含めた生態系の構築が重要であり、生態研究部（当時）の研究員などが、エサ資源に関する環境情報などの協力を行い、1993（平成5）年のコウノトリの郷公園候補地の決定（豊岡市祥雲寺地区）、1995（平成7）年の基本計画の策定などに関与してきた。

同時に、豊岡市役所、建設省（当時）、コウノトリ市民研究所などと協力して、コウノトリが住むやすくするための生態学的方策（生態系豊かな水田づくり、水田の連続する排水路の確保河川、自然と共生する河川づくりなど）に協力・実践を行った。

1996（平成8）年11月から1997（平成9）年3月には、ひとはくにて企画展「コウノトリとわたしたち」を行い、コウノトリ展示の展開を行い、その一部は豊岡市立コウノトリ文化館の展示にも活用されている。

1999（平成11）年11月にコウノトリの郷公園が開園して、具体的な研究・保全活動が展開されている。公園の主なスタッフは兵庫県立大学自然・環境研究所（田園生態系）に属することもあり、交流が続いている。

（鈴木 武）

震災対応（野島断層記念館を含む）

1995（平成7）年1月17日に発生した阪神・淡路大震災は兵庫県に甚大な被害を与えた。1994（平成6）年7月に「災害利島～日本」をテーマに行った講義の中で尾池和男京都大学教授（当時）が有馬～高槻構造線などの活断層の危険性を指摘したまさに直後であった。

ひとはく自体はスプリンクラー配管が破損して水が吹き出すという程度の被害に留まり、人的被害もなかったが、交通網は寸断されて、組織的な行動をすぐに取りれる状況ではなかったが、地球科学研究部（当時）の研究員は、外部研究者と震源地などの緊急現地調査などが始まった。地震直後の1月19日には野島断層の発掘調査が始まり、3月には地層のはぎとりを行った（本館3階に展示している）。

1週間もすると、日本建築学会との共同で、建築物・家屋の被害状況を詳細な現地調査が始まった。被害マップとして記録を残した（これをベースとした陶板のマップが本館3階に展示されている）。また東京の美術館グループから被災地の美術品の救済を行う人員の宿泊施設の打診があり、ジーンファーム管理棟で対応した。2011年東日本大震災時の標本レスキューに相当することも行われていたのである。また加藤らが直後の一ヶ月に行った墓石のずれ調査からは六甲山南東部での断層の活動の推定に有益であった。

1995（平成7）年度にはいと、六甲山総合共同研究としての兵庫県南部地震の学術的データの収集を行うとともに、館員は震災復興に関わる国・県の委員会に参加して提言に関与してきた。阪神・淡路大震災は市民ボランティアが復興に貢献して、市民ネットワークの活動が評価されるきっかけとなった。「ガレキに花を咲かせましょう」など市民ネットワークによる活動にはやまちづくりのノウハウのある環境計画研究部の研究員などが関わっていった。

上記を含めて、震災直後の1年でひとはくが行った調査や成果は「兵庫県南部地震における人と自然の博物館の活動」（1996年）にまとめられており、1996年11月には企画展「兵庫県南部地震を考える」を開催し、学術的な資料集として「阪神・淡路大震災と六甲変動」を1997年3月に発行した。

単なる学術研究機関としてのみでなく、シンクタンクとして貢献が行えたのが、野島断層保存館である。淡路島北淡町（当時）の野島断層は阪神淡路大震災の震源地であり、地表に断層が生じていた場所である、野島断層保存検討委員会委員であった加藤研究員を中心に、学術的意義だけでなく、環境学習の素材としての活用、効果的な展示方法など多面的な協力を行った。

「六甲山グリーンベルト」もふれておくべきだろう。神戸・阪神地区の背山である六甲山は花崗岩からなり、戦前からたびたびの水害を起こし、植林・砂防ダムなどの対策が撮られてきた。震災を機に住民参加も入れて、国、兵庫県、神戸市などが連携して「六甲山系グリーンベルト」を、防災、景観、生物多様性、環境学習の場として整備をすすめるものである。計画に関しては中瀬など環境計画研究部、植生・生物多様性については服部をはじめとする生物資源研究部などが関与して、これまで着々と整備が進められてきた。

（鈴木 武）

丹波の森公苑との連携

2006（平成18）年4月に柏原町（当時）に開園。1988（昭

和63)年設立の丹波の森協会(当時)が運営している施設である。1989(平成元年)年の「丹波の森構想」の中核施設である。同構想では、森・田畑・集落・河川などを含む地域全体が「丹波の森」であり、みんなが協力してよい環境をつくろうとするものであり、丹波の森公苑は丹波でのコミュニティ・シンクタンクの中核施設ともいえる。

ひとはくは、地元出身の河合雅雄館長(当時)、構想時から関与している中瀬部長(当時)が大きく関与しており、この二人がのちに苑長を勤めている。さらには環境計画研究部の研究員などが設立に際しての運営方針、市民グループの活動、森づくりなどの関係をしてきた。また、ひとはく研究員の指導を受けた大学院生が丹波の森協会職員になったり、丹波の森の経験者がひとはく研究員になったり的人事交流、丹波の森大学でのひとはく研究員の講演などさまざまな関係性の中での協力が続いている。

県CSR事業で2002(平成14)年に設置された「ささやまの森公園」も丹波の森協会が運営しているが、河合雅雄公苑長の元でひとはくのミュージアムティーチャーであった樋口清一氏が事務局長を勤め、ひとはく研究員の協力の元で、植物リストの作成、貴重植物の保全などが行われてきている。

(鈴木 武)

(3) 発展期(新展開以後～現在)

コミュニティ・シンクタンクの目標設定(博物館の新展開)

新展開以降において、博物館の大きな2つの活動軸として「自然・環境に関するシンクタンク活動」および「生涯学習の支援」を掲げて活動を展開した。2つの活動軸は、独立のものではなく、相互の関係性をもって推進された。シンクタンク活動においては、博物館活動の基盤となる収蔵資料等の情報活用や自然環境情報の整備にはじまり、県政課題への貢献だけでなく、基礎自治体や地域コミュニティや各種団体からの要請に応じた多様な対応につとめてきた。シンクタンクという用語は、政策や社会開発を受け持つ民間企業によるシンクタンク機関や企業研究所のイメージが強いが、当館では、生涯学習や展示運営、研究開発などを含めて、あらゆる主体と協働して地域課題の解決に取り組むコミュニティシンクタンクとしての機能を果たすことを目的とした。

新展開においては、おもに「自然環境情報の一元管理」と「総合的なシンクタンク事業」の2つの観点から様々な取り組みが展開され、「電子情報の利活用」、「資料の利用促進」、「各機関からの相談件数」、「館員が関与したプロジェクト数」が指標となった。特に、新展開以降において、外部と共同したプロジェクト開催が促進されており、新展開以降の10年間(2001年～2011年)で、延べ4000件以上の行政課題に対応している(図4-5上)。例えば、レッドデータブックの作成や野生鳥獣管理の問題、外来種対策、道路や山林、河川などにおける公共事業へのアドバイスや計画づくり、都市計画や公園管理に関する事業支援などで、様々な館員が関わ

るようになった。こうした関わりが増加した要因には、各地でのキャラバン事業(移動博物館およびセミナー)の展開が関係し、当初の計画で想定したとおり、シンクタンク活動と生涯学習が両輪で機能したと考えられる。これらのシンクタンク活動を通じて、植生調査や環境読本の編纂等の行政機関からの受託研究の実施、環境情報や公共事業における調査標本の整備における分任事業、公園運営や施設運営などの協定など、より密接な関係へと発展している事業もある。

県内の事業だけに限らず、西日本を中心とした自然史系の博物館、科学館等の学芸員・研究員による連携組織であるNPO法人西日本自然史系博物館ネットワークへの参画、JICAによるボルネオ島サバ州における国際プロジェクトや、GBIF(地球規模生物多様性情報機構)、ジオパークへにも貢献してきた。さらに、近年では、県の行政課題への対応や単一の外部要請に応えるだけでなく、基礎自治体や企業、学校、市民(団体)といった地域の多様な主体が複合的に関わり、そして多様な主体による地域課題の解決を志向した取り組みが展開されてきた(図4-5下)。県立有馬富士公園の運営やキリンビール三田工場における希少種保全などがある。近年では、関西広域連合や民間企業、各種自治体、博物館などの多様な主体の参画によって「生物多様性協働フォーラム」を6回開催し、生物多様性に関する広域的な取り組みやこれまで関心や関係が無かったステイクホルダーへの情報発信が行われた。

(三橋弘宗)

キャラバン事業の展開

キャラバン事業の推進は、シンクタンク活動と密接な関係がある。まず、キャラバン事業の試行的な実施を行うにあ

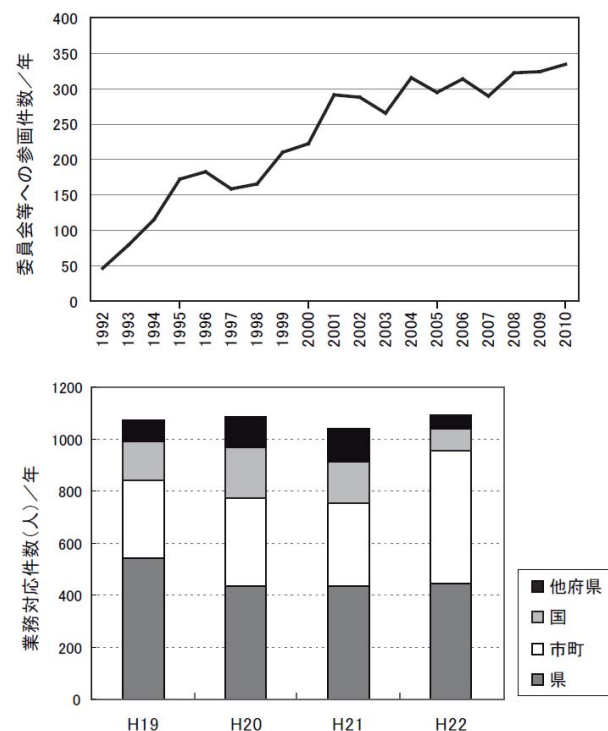


図4-5 ひとはくのシンクタンク活動の経年変化(上)および過去4年間の業務対応(相談数)の割合(下図)

(三橋弘宗)

たって、朝来町を選択した(2001年3月)。これは、当館の中瀬勲が町が主催している、まちづくり関連の事業の委員会として参画しており、地域の方々との親密な交流があったことが大きい。その後も、キャラバン事業の開始当初は、館員がこれまでにシンクタンク事業として委員会等を通じて人的ネットワークが形成されている地域を対象としたことで、円滑に運営できた側面が大きい。新展開以前は、博物館の活動として積極的に館外に出かけてイベントや展示を行う機会は少なく、特に館外の機関や団体と共催した事業は非常に限られていた。しかし、新展開以降は、これまでの人的な関係を活かし、地域の方々と協働して開催するキャラバン事業の実施が進められることで、より一層、県や市町の行政機関をはじめ、地域の団体や住民、学校との交流が促進され、博物館の存在が周知される結果となった。この効果により、来館者等も新展開以降に増加した。こうしたシンクタンク活動と地域展開の取り組みは、新展開以前は、まちづくり系分野の研究員に偏りがちであったが、キャラバン事業として全館をあげて開催することで、多くの館員が外部との交渉や連携、地域課題の認識や対応方法の理解が促進された側面がある。キャラバン事業が大きく展開をはじめた2003～2005年頃には、外来種をテーマとした展示物や対象地域の環境保全や地域づくりに関するテーマ等に見合った展示やイベントの開催が行われ、シンクタンク活動と生涯学習が一体となった総合的なシンクタンク活動として展開されようになり、現在に至っている。

(三橋弘宗)

県政学会への参画

博物館では、新展開以前までも行政からの依頼を受けて、委員会への参画や事業へのアドバイスをを行っていたが、一部を除いて組織的に依頼を受けることは少なく、個人ベースでの協力が主だった活動形態であった。このため、博物館が対応できるシンクタンク活動あるいは生涯学習支援の内容は良く知られておらず、行政職員との関わりは一部をのぞいて乏しい状況であった。このため、2000年度から兵庫県自治研修所が開催する兵庫県県政学会におけるデモンストレーションコーナーへの展示出展を行った。初年度には、博物館の淡水生物に関する標本や自然環境に関するデータベース活用について展示を行い、環境関連部局のみならず、都市計画関連や企業庁、企画部等の職員とフェイスツーフェイスの交流を行うことができた。この年以降、化石の発掘に関する展示や昆虫標本、まちづくりといった当館の幅広い取り組みを紹介するとともに、ひとはくキャラバン事業に関する広報や誘致を行い、ひとはく自体やキャラバン事業の知名度向上を図ることができた。このデモンストレーションコーナーの設置は、2008年度まで開催されたが、これ以降は予算措置がなされず、中止となった。当館としては、合計9回の出展となったが、ブースでの様々な行政職員の方との対話等を通じて、博物館のシンクタンク機能について情報発信する機会となった。

森林動物研究センターの設立支援

新展開がはじまった2000年前後には、兵庫県では以前からシカやサルによる農業被害の増大と森林被害が深刻な問題となっていた。一方、ツキノワグマは個体数が少ないために絶滅危惧種に指定されている同時に、人の生活圏への侵入によって人身被害や果樹等への被害の危険性がある。アライグマやヌートリアのように外来種の蔓延も顕在化しつつあった。このように、大型の野生生物の問題は、駆除や防除だけでなく、森林植生への影響や、個々の種や生態系の保全、さらには地域への普及啓発といった多面的な課題を総合的に解決することが求められていた。

しかし、こうした野生動物管理に関する研究知見は乏しいため、兵庫県として、この問題解決の窓口として当館が指名された。これを受けて、当館では生態研究部(三谷雅純、坂田宏志、三橋弘宗、横山真弓)が中心となって、対応方策をとりまとめ、2000年には「野生動物ふれあいの郷公園(仮称)構想」の検討がはじまった。その後、丹波県民局を中心として、構想検討委員会が設置された。この間、シカの被害予測やツキノワグマの生息地予測、外来動物の分布調査などの県政課題と直結した研究論文をとりまとめ、当館の研究活動が施策の意志決定に貢献してきた。2003年からは、当館の坂田宏志、横山真弓が兵庫県庁にデスクを構え、農林水産部森林動物共生室の係長および担当を兼務し、野生動物管理に関わる全般的な業務を推進した。教育委員会に所属する博物館の職員が、県庁の基幹業務を兼務する国内で初めての事例となった。県政課題の解決をはかる上で、こうした科学的な専門性をもとに、2004年には「森林・野生動物保護管理研究センター(仮称)整備基本方針」を策定し、2007年に、兵庫県丹波市青垣町に、現在の「兵庫県森林動物研究センター」が設立され、兵庫県立大学自然・環境科学研究所の森林動物系が新設された。さらに博物館との連携を促進するために、植生学分野から2名(服部保、石田弘明)が兼務し、共同研究が行われている。当館の研究開発ならびにシンクタンク事業が発端となって、野生動物管理に関する総合的な施策立案、県庁業務の兼務、さらには研究機関の設立が実現している。

(三橋弘宗)

GBIF 事業への参画

GBIFとは、Global Biodiversity Information Facility(地球規模生物多様性情報機構)の省略で、OECDの勧告を経て、2001年に発足した生物多様性情報のデータベース構築を推進する国際プロジェクトである。我が国では、2001年2月にGBIFへの加盟調印。設立当初から、当館の岩槻邦男館長が国際プロジェクトの執行委員会副座長をつとめて、国内のみならず、国際的な取り組みを牽引されてきました。これを受けて、国内でも国立遺伝学研究所および国立科学博物館において取り組みが開始されました。当館では、国立科学博物館が2004年度から運営を開始した「サイエンスミュージア

ムネット」に対して、NPO 法人西日本自然史系博物館ネットワークの構成メンバーとして準備段階から企画運営に参画し、研究会の開催やデータベース支援ツールの設計など、全国規模におけるデータ整備の推進体制の確立に貢献してきた。これと並行して、館内では2004年から2007年にかけて、館内のタスクフォース事業として、GBIF 対応チームを位置づけて、館内・国内事業の推進に協力した。また、GBIF 本部からのシードマネー（DIGIT）を調達し、館内のデジタルデータに関するデジタル化を図った。これらの支援を受けることで、2006 年度から収蔵品資料を GBIF およびサイエンスミュージアムネットにて公開を開始した。これまでに、昆虫、植物、魚類、底生動物、鳥類の分野において、542,373 点（国立科学博物館より 21,2806 点、国立遺伝学研究所より 329,567 点）の情報が公開されており、世界中からアクセスすることが可能になっている。2009 年より、国内における GBIF 事業の運営を取り仕切る GBIF 日本ノード運営委員会にも参画し、国内体制の確立にも対応している。

（三橋弘宗）

外来生物問題

2003 年 12 月の県庁からの外来種対策についての検討依頼を受け、2004 年 2 月に館内における外来種問題の検討チームを設置し、同年 4 月から館内における外来種問題検討プロジェクト（総合共同研究「兵庫県における外来種対策の検討」）を開始した（2005 年度までの 2 カ年）。また、外来生物法の制定（環境省 2004 年 6 月）を受け、県内の主要部局に参加を呼びかけ「兵庫県の移入種対策にむけた提案策定委員会」を主催、兵庫県下の外来生物問題の解決に向けた課題とその解決方法について協議し、2005 年 3 月にその内容を「兵庫県の外来生物対策に向けた提案 報告書」にとりまとめ、施策提言を行った。

普及啓発活動の一環としては、2005 年 7 月～9 月にかけて企画展「兵庫の外来生物」を開催した。

行政の外来生物対策施策への支援では、2006 年に県自然環境課が設置した「生態系保全対策検討委員会（特定外来種法に関する対策）」に委員を派遣している。また、生物多様性ひょうご戦略に基づき、2009 年度に県自然環境課による兵庫県下での侵略的外来生物の選定・リスト化が行われ、館員 5 名（服部、江崎、太田、田中、橋本延）がその選定作業に委員として参画した。なおリストは 2010 年 3 月に「外来生物リスト（ブラックリスト 122 種）」として公表された。

外来生物問題に対するシンクタンクでは、兵庫県下での問題発生初期段階で包括的な提案を実施するなど迅速な対応に貢献した。またひとく提案を「生物多様性ひょうご戦略」を通じて県政施策として定着化させ、対策報告書、外来生物リストを他府県に先駆けて示すことに貢献した。

しかし、県内の外来生物問題の取り組みは十分とはいえないことから、今後は、（1）県関係各部局、県下市町の担当部局と外来生物対策に関する知見や研究例、対策事例などの

共有化を図ること、（2）外来生物が兵庫県の生物多様性や県民生活に及ぼす影響などについて、報告書や展示、セミナーなどを通じて継続して県民に情報発信すること、（3）課題解決手法の開発や新たな外来生物による影響の評価を行うための研究をすすめること、といったシンクタンク活動が求められている。

（橋本佳延）

生物多様性ひょうご戦略

第 3 次国家戦略の策定以降、岩槻館長が兵庫県版の生物多様性地域戦略の策定の必要性を知事、県自然環境課など関係各所に提案を続けていた。2007 年 11 月に策定された第 3 次国家戦略の中で都道府県版戦略性の必要性が指摘されたことを受け、県自然環境課は 2008 年 2 月より戦略策定に向けて準備を始め、ひとくは県自然環境課からの協力要請を受けて策定委員会事務局に参画することとなった。2008 年度には生物多様性 TF を館内で組織し、戦略策定事務局の運営を支援する体制を整えた。2008 年 6 月に県環境審議会自然環境部会の下で生物多様性ひょうご戦略策定委員会が発足し、多数の研究員が委員会委員の委嘱をうけたほか、草案の執筆に協力するなどひょうご戦略の策定に関わった（1 回目：6 月、2 回目：8 月、3 回目：10 月、4 回目 3 月）。ひょうご戦略は 2009 年 3 月に策定され、以後の戦略の実施（RDB の改訂、生物多様性配慮指針など）においても多数の研究員が委員として、また生物多様性アドバイザーとして参画している。

ひょうご戦略の策定期間は約 1 年という短期間であったが、多数の研究員の参画により内容の充実を図ることができた。特に、これまでの県自然環境行政へのシンクタンク活動の実績を踏まえ、兵庫県の生物多様性に関する課題を抽出し戦略に盛り込むこと、資料や研究成果を元に兵庫県の生物多様性の概要について記載すること、数値目標の設定など他都道府県にない特徴を持った戦略に仕上げたことなどに貢献した。

今後は、引き続き戦略の実施に対する支援（県 RDB 改訂、生物多様性アドバイザー、生物多様性支援拠点など）を進めるほか、県下市町に戦略策定を働きかけるとともに策定を支援すること、戦略改訂にむけての支援体制の整備することなどが求められる。

（橋本佳延）

(4) COP10 への出席

2010（平成 22）年に生物多様性条約第 10 回締結国会議が名古屋市で開催されることを受け、生物多様性に関して先進県と自負する兵庫県は参加するを表明した。兵庫県内での役割分担の結果、COP10 会場隣接地での生物多様性フェアはひとくが、会場内でのサイドイベントなどは県自然環境課・ひょうご環境創造協会、県内でのイベントはひょうご環境創造協会が主体となって行うこととなった。関係する機関として、アジア太平洋地球変動研究ネットワーク（APN）セ

ンター、国際エメックスセンター（EMECS）も含めて、調整会議が行われた。

COP10は10月18日～29日（12日間）に、名古屋市熱田区白鳥公園で開催され、ひとはくは兵庫県ブースにおいて「ひとはくの生物多様性への取り組み」「里山の保全」などについて展示した。このほかに関連機関による展示、県立御影高校の「六甲山のキノコ」、名古屋まで来訪した県内9団体の展示もブース内で行った。このようにひとはくは兵庫県代表としてのハブ機能も果たした。

さらに、兵庫県自然環境課やひょうご環境創造協会が行ったサイドイベント（COP10会場内）やフォーラム（名古屋学院大学）、さらには里山に関する知事サミットなどには関連した内容の研究員を派遣して、兵庫県の生物多様性への取り組みのPR活動を支援した。

（鈴木 武）

受託研究

博物館の新展開における活動方針の一つ、「自然・環境シンクタンク機能の充実化」の一環として、2000年度より民間企業や公的機関等からの研究調査委託の受け入れを開始した。受託研究は、研究型博物館の特徴を活かしたシンクタンク事業であると同時に、運営面においては特定財源化による弾力的な予算執行のあり方を具体化した事業である。

2000年度の「三田市有馬富士自然学習センター運営計画策定事業」（三田市）をはじめとして、これまでに4件（2001年度）、5件（2002年度）、8件（2003年度）、9件（2004年度）、17件（2005年度）、20件（2006年度）、19件（2007年度）、16件（2008年度）、13件（2009年度）、14件（2010年度）、14件（2011年度）の研究を受託した（表4-2）。

（佐藤裕司）

サバプロジェクト

1997年6月、マレーシア国立サバ大学と国際学術交流協定を締結し、以来「ひとはく・サバ大学共生生物学研究事業」としてボルネオ島熱帯雨林での学術調査、研究成果にもとづく展示などの博物館活動、ボルネオジャングル体験スクールなどの環境教育プログラム、海外開発援助（ODA）事業への協力など幅広い国際交流活動を続けている。

調査研究活動は、兵庫県立大学の特別研究助成や民間からの研究助成を受けて、1998～2001年の間にタビン野生



写真4-1 岩槻館長によるCOP10解説ツアー

物保護区において4回、マリアウベイスン自然保護区で2回、クリアス・ビンスル泥炭湿地林保護区とクロッカー山脈保護区でそれぞれ1回、インベントリー作成のための調査に取り組んだ。また、この間、兵庫県淡路市で開催された「国際花と緑の博覧会（ジャパンフローラ2000）」（2000年3月18日～9月17日）の展示製作に協力するなど、県政にも貢献した。

2002～2007年は、国際協力機構（JICA）の「ボルネオ生物多様性・生態系保全プログラム（BBEC）」に協力し、研究員が長期派遣専門家として、サバ州での生物相調査の指導・実施、サバ大学熱帯生物学・保全研究所の自然史博物館機能の確立、サバ州内の自然環境保全研究機関間のネットワーク構築などの事業に取り組んだ。この間、2005（平成17）年度に、「東南アジアにおける共生生物学の構築―森・人・水の持続性を究める―」という研究課題名で科研費申請をしたが採択されず、研究面での取り組みはBBECの修了後、主に個人ベースで進められている。

ボルネオジャングル体験スクールは1998年の夏休みに始まり、2011年に第13回のスクールを実施し、現在に至っている。2012年に協定更新の時期を迎えた。

（佐藤裕司）

恐竜化石

2006（平成18）年8月、丹波市山南町の篠山川河岸で竜脚類の恐竜化石（通称「丹波竜」）が発見された。それ以来、ひとはくでは篠山層群（中生代白亜紀前期の地層）における恐竜化石等の発掘調査と古生物学的研究を進めながら、恐竜化石等を生涯学習やまちづくりへ活かしていくための取り組みを行っている。調査研究とまちづくり支援を効果的に推進するために、2007（平成19）年度より恐竜・化石タスクフォースを立ち上げ、古生物学だけでなく異分野の館員も加えた組織編成で、恐竜化石等を活用した展示や学習プログラムを地域と連携しながら展開している。

丹波竜の発掘調査は、毎年、河川水位の低下する冬期の渇水期に実施され、2007年の第1次から2011年の6次にわたって調査が行われてきた。これと並行して、地元市民の協力により、篠山層群が分布する丹波市および篠山市で化石探索が進み、国内でも希少な哺乳類化石、カエル類やトカゲ類の化石、さらには羽毛恐竜の化石などの発見が相次いでいる。



写真4-2 ひとはく出展ブースの様子

表 4-2 受託研究実績一覧（2000~2011 年度）

年度	委託名			
2011 (平成23)	平成23年度兵庫県域新名神高速道路における貴重種の保全業務（その1）[西日本高速道路株式会社関西支社兵庫工事事務所] 丹波地域の化石資源を活かした人づくりのための調査研究委託[たんば恐竜・哺乳類化石等を活かしたまちづくり推進協議会] 山陰海岸ジオパークにおけるアウトリーチ事業[山陰海岸ビオトープ推進協議会] 野島断層保存・活用研究業務委託[淡路市] 平成23年度兵庫県域新名神高速道路における貴重種の保全業務（その2）[西日本高速道路(株)関西支社兵庫工事事務所] ミツカンよかわビオトープの効果的な広報に関する研究その3[(株)ミツカングループ本社] 慶野松原維持のための林床植生適正化に関わるウンラン等栽培・管理業務[県立淡路景観園芸学校] 西宮市生物多様性地域戦略策定に関わる調査・資料作成業務[西宮市] 南公園里山体験等委託業務[三田市] パークマネジメントの人材養成に関する研究その5[阪神北泉民局] 23年度シダ類・ラン類の栽培等業務[(財)ひょうご環境創造協会] 大阪ガス(株)姫路製造所等における生物多様性対応関連業務[大阪ガス(株)CSR・環境部] キリンビール工場におけるレフュジアビオトープ創出に関する研究[キリンビール(株)神戸工場] 平成23年度尼崎の森中央緑地地域性苗木栽培業務[阪神南泉民局] 平成22年度兵庫県域新名神高速道路における貴重種の保全業務[西日本高速道路株式会社関西支社兵庫工事事務所] 平成22年度 大阪ガス株式会社姫路製造所等における生物多様性対応関連委託業務[大阪ガス(株)CSR・環境部] シダ類・ラン類の栽培等業務[(財)ひょうご環境創造協会] 貴重な種の仮置き養生管理業務委託[(財)ひょうご環境創造協会] キリンビール工場におけるレフュジアビオトープ創出に関する研究[キリンビール株式会社神戸工場] ミツカンよかわビオトープの効果的な広報に関する研究その2[(株)ミツカングループ本社]			
	2010 (平成22)	丹波地域の化石資源を活かした人づくりのための調査研究委託[たんば恐竜・哺乳類化石等を活かしたまちづくり推進協議会] 野島断層保存・活用研究業務委託[淡路市] 慶野松原維持のための林床植生適正化に関わるウンラン等栽培・管理業務[県立淡路景観園芸学校] 尼崎の森中央緑地地域性苗木栽培業務[阪神南泉民局] 南公園里山・育成プロジェクト基本調査[三田市] 森林ボランティア育成教本の発行業務[(社)兵庫県緑化推進協会] パークマネジメントの人材養成に関する研究その4[阪神北泉民局] 西宮市生物多様性地域戦略策定に関わる調査・資料作成業務[西宮市] シダ類・ラン類の栽培等業務[(財)ひょうご環境創造協会] オグラコウホネ等管理業務[丹波泉民局] 平成21年度尼崎の森中央緑地地域性苗木栽培業務[阪神南泉民局] 城郭石垣の石材産地分析[特定非営利活動法人 城郭遺産による街づくり協議会] キリンビール神戸工場におけるレフュジアビオトープ創出に関する研究[キリンビール(株)神戸工場] 野島断層の保存・活用に関する研究[淡路市教育委員会]		
		2009 (平成21)	福本大蔵神社およびその周辺の植物・植生等調査[福本水士郷会] ミツカンよかわビオトープの効果的な広報に関する研究[株式会社ミツカングループ本社] 三木総合防災公園における住民参画型公園運営に関する研究[北播磨泉民局] 恐竜・哺乳類化石等を活かしたまちづくり関連地域環境基礎調査[(財)兵庫丹波の森協会] 慶野松原維持のための林床植生適正化[淡路景観園芸学校] 兵庫県域新名神高速道路における貴重種の保全業務[西日本高速道路株式会社関西支社兵庫工事事務所] パークマネジメントの人材養成に関する研究その3[阪神北泉民局]	
			2008 (平成20)	C8環境大臣会合開催記念シンポジウム広報業務[環境省自然環境局自然環境計画課] オグラコウホネ等管理業務委託[丹波泉民局] シダ類・ラン類の栽培等業務[(財)ひょうご環境創造協会] 平成20年度自然環境調査補足業務委託[三田市] キリンビール神戸工場におけるレフュジアビオトープ創出に関する研究[キリンビール(株)神戸工場] 尼崎の森中央緑地 地域性苗木栽培業務[阪神南泉民局] 平成20年度川西市北部の里山の現状調査[川西市] ミツカンよかわビオトープと生物多様性に関する研究[株式会社ミツカングループ本社] 平成20年度北摂里山検定業務[阪神北泉民局] 加古川小野線道路改築事業にともなう生痕化石露頭の保存と学校教材に関する研究[東播磨泉民局]

表 4-2 受託研究実績一覧（2000~2011 年度） つづき

年度	委託名
2008 (平成20)	パークマネジメントの人材養成に関する研究その2 [阪神北泉民局]
	ウチワゴケ栽培業務 [株式会社総合コンサルタント中国支店]
	国道178号線道路緑化作業推進業務 [株式会社長大]
2007 (平成19)	平成19年度自然環境調査補足業務(経年変化調査) [三田市]
	丹波地域の集落活性化戦略に資する住民意識の実態把握業務 [(財)兵庫丹波の森協会]
	北播磨自然指導員育成に関する業務委託 [NPO法人北播磨市民活動支援センター]
	尼崎の森中央緑地 地域性苗木栽培業務 [阪神南泉民局]
	台場クヌギ分布調査業務 [阪神北泉民局]
	貴重植物の冠水耐性実験並びにシダ類・ラン類の栽培業務 [(財)ひょうご環境創造協会]
	人工照明の設置がヒメボタル個体群に与える影響に関する調査 [猪名川上流広域ごみ処理施設組合]
	オグラコウホネ等管理業務委託 [丹波泉民局]
	黒井川オグラコウホネ保全対策検討業務 [アジア航測株式会社]
	水道生物の分類と同定に関する研修 [兵庫県企業庁東播磨利水事務所]
	キリンビール神戸工場内レフュジアビオトープ創出に関する研究 [キリンビール (株) 神戸工場]
	国道178号線道路緑化作業推進業務 [株式会社長大]
	平成19年度みくまりダム環境調査・保全対策検討業務 [株式会社東京建設コンサルタント兵庫事務所]
エドヒガンの分布・個体群構造・生育環境に関する調査 [独立行政法人水資源機構一庫ダム管理所]	
ミツカン・三木市・ミツカンよかわビオトープ倶楽部における連携と分担に関する研究 [株式会社ミツカングループ本社]	
パークマネジメントの人材養成に関する研究 [阪神北泉民局]	
有馬富士公園湿地帯の適正利用確立に関する業務 [阪神北泉民局]	
ひのそ島における種子及び埋土種子の発芽実験について [(株) 建設技術研究所大阪本社]	
2006 (平成18)	平成18年度自然環境調査補足業務(経年変化調査) [三田市]
	猪名川上流広域ごみ処理施設造成工事がヒメボタル個体群へ与える影響に関する調査 [猪名川上流広域ごみ処理施設組合]
	六甲山系の里山林再生マニュアル作成事業 [神戸泉民局]
	オグラコウホネ等管理業務 [丹波泉民局]
	猪名川上流広域ごみ処理施設造成工事の植生に関する調査 [猪名川上流広域ごみ処理施設組合]
	阪神北地域の里山林に関する調査 [阪神北泉民局]
	尼崎の森中央緑地 地域性苗木栽培業務 [阪神南泉民局]
	平成18年度生態系総合管理基盤情報整備里地里山検討業務 [環境省]
	キリンビール神戸工場内レフュジアビオトープ創出に関する研究 [キリンビール (株) 神戸工場]
	企業研修「リコー親子自然教室 in ひとはく」事業 [(株) リコー]
	国営明石海峡公園神戸地区管理運営計画検討作業 [(社) 日本公園緑地協会]
	西播磨ふるさとの風景づくり 3D-GISシステム構築業務 [西播磨泉民局]
	武庫川ダム貴重植物の育成管理業務 [(財)ひょうご環境創造協会]
六甲山を舞台とした市民団体活動に関する調査業務 [神戸泉民局]	
「知ろう・活かそう・三田の川」プロジェクトにおける情報発信ツールの開発及び市民向け講座の実施 [阪神北泉民局]	
2005 (平成17)	川西市国崎宇小路 (ごみ処理施設建設地) におけるヒメボタルの生息状況調査、保全措置にかかる研究 [猪名川上流広域ごみ処理施設組合]
	17年度自然環境調査補足業務 [三田市]
	オグラコウホネ等管理委託 [兵庫県丹波泉民局 (篠山土木事務所)]
2004 (平成16)	キリンビール神戸工場内レフュジアビオトープ創出に関する研究 [キリンビール (株) 神戸工場]
	三ツ星ベルト株式会社の環境に関する企業研修 [三ツ星ベルト株式会社]
	尼崎の森中央緑地流域産種子採取業務 [阪神南泉民局 (西宮土木事務所)]
	六甲山を舞台とした市民団体活動に関する調査研究 [兵庫県神戸泉民局 (神戸土木事務所)]
	子どもブレイクリーダーの養成方法およびサポーターチームの組織化のあり方について その2 [兵庫県阪神北泉民局]
2004 (平成16)	キリンビール神戸工場内レフュジアビオトープ創出に関する研究 [キリンビール (株) 神戸工場]
	三ツ星ベルト株式会社の環境に関する企業研修 [三ツ星ベルト株式会社]
	三原郡緑町の和泉層群産翼竜化石等の研究 [三原郡緑町]
	六甲山を舞台とした市民団体活動に関する調査研究 [兵庫県神戸泉民局]
	オグラコウホネ等管理委託 [兵庫県丹波泉民局]
武庫川水系 武庫川河川敷内立木調査 [兵庫県阪神南泉民局]	

表 4-2 受託研究実績一覧（2000～2011 年度）つづき

年度	委託名
2003 (平成15)	ミツカン吉川ビオトープ整備に関する研究〔(株)中塾酢店〕
	明石川におけるタナゴ類の再生に関する研究〔兵庫県神戸県民局〕
	三田まちなみガーデナー養成講座の企画・立案・コーディネート及び講座後の展開に関する研究〔(財)三田市都市施設整備管理公社〕
	子どもプレイリーダーの養成方法およびサポーターチームの組織化のあり方について〔兵庫県阪神北県民局〕
	キリンビール神戸工場内レフュジアビオトープ創出に関する研究〔キリンビール(株)神戸工場〕
	常隆寺山・伊勢の森の町民利用に関する調査研究〔北淡町〕
2002 (平成14年)	六甲山を舞台とした市民団体活動に関する調査研究〔兵庫県神戸県民局〕
	五色塚古墳からの石材産地同定に関する調査〔神戸市教育委員会〕
	キリンビール神戸工場内のレフュジア・ビオトープ創出に関する研究〔キリンビール株式会社神戸工場〕
	三原郡緑町の和泉層群産化石に関する研究〔(財)三田市都市施設整備管理公社〕
	明石川におけるタナゴ類の再生に関する研究〔兵庫県神戸県民局〕
	三田まちなみガーデナー養成講座の企画・立案・コーディネート及び講座後の展開に関する研究〔(財)三田市都市施設整備管理公社〕
2001 (平成13)	明石川におけるタナゴ類の再生に関する研究〔兵庫県神戸県民局〕
	六甲山を舞台とした住民活動に関する調査研究〔兵庫県神戸県民局〕
	キリンビール神戸工場内のレフュジア・ビオトープ創出に関する研究〔キリンビール株式会社神戸工場〕
	ヨウ化メチル薫蒸による、自然史系収蔵品DNA情報への影響評価と新規DNA抽出法の開発〔日宝化学株式会社〕
2000 (平成12)	ワイルドドライブ・マネジメントに関する研究〔兵庫県丹波県民局〕
	竹野町まちづくりにおける住吉屋再生・利活用支援研究〔竹野町〕
	三田市有馬富士自然学習センター運営計画策定事業〔三田市〕

学術的な観点から、篠山層群は当時の脊椎動物群の多様性を解明する上でも重要な地層であることが明らかにされつつある。

その一方で、ひとはくでは丹波竜の発見当初から、恐竜化石等を活用した展示やさまざまな学習プログラムを地域と連携しながら実施してきた。2010（平成22）年5月には、ひとはく、丹波県民局、篠山市、丹波市、(財)兵庫丹波の森協会、たんば恐竜・哺乳類化石等を活かしたまちづくり推進協議会の6者による「篠山層群における恐竜、哺乳類化石等に関する基本協定」が締結され、地域連携のさらなる強化が図られることとなった。ひとはくはこの協定において、恐竜化石等の発掘調査、恐竜化石等の保存・保護、収蔵資料の保管・管理、恐竜化石等の学術研究、恐竜化石等の利活用（学術的側面からの市等への助言、協力、学術情報の提供など）といった役割を担っている。

また、このプロジェクトでは、発掘調査を地元市民のボランティア参加で実施することで、人材育成にも取り組んできた。2007（平成19）年度のキャラバン事業では、発掘現場の岩石片を用いたリサーチプロジェクト（化石探索）を行いながら、発掘ボランティアの技術向上に取り組んだ。それらの成果として、ひとはく地域研究員（発掘体験指導員）に16名の登録があり、現在、地域研究員は地元の上久下元気村を拠点に発掘体験などの活動を展開している。

丹波竜が発見されて以降の経緯および主な取り組みは表4-3の通りである。

（佐藤裕司）

2) データで見るシンクタンク活動 20 年間の成果

(1) 行政・企業へのシンクタンク

行政からの相談件数

最近4年間（2007年度～2010年度）の行政からの相談件数を図4-6に示した。これをみると、合計数では大きな変動はないものの、年間で1000人を上回る状態が維持されている。内訳（表4-4）をみると、県職員の数も2008年以降450名弱でほぼ同数で推移している。また、国家職員や他府県職員の割合がやや減少する一方で、市町村職員の割合が増加傾向にある。2007年に第3次生物多様性国家戦略が決定されてからは、生物多様性地域戦略の策定など、市町村の取り組みが活発化していることが、背景にあると考えられる。

行政の委員会への参画数

1992年度から2010年度にかけての県や市町村の委員会への参画数を図4-7に示した。これをみると、300件を上回る数でほぼ横ばいで推移している。しかし、全体数から数名の幹部の実績を差し引いた数をみると、必ずしも若手や中堅の参画数が伸びているわけではない。今後は、幹部の引退後の若手や中堅メンバーに実績づくりが求められる。なお、2009年に幹部抜きの数値が増加したのは、兵庫県版レッドデータブックの改訂に博物館の研究員が多数関わったためである。

兵庫近隣の大学が県設置委員会に派遣した委員数

2010年度に兵庫近隣の大学が県設置委員会に派遣した委

表 4-3 丹波竜が発見されて以降の経緯および主な取り組み

年月日	内 容
<2006 (平成18) 年度>	
8.7	地学愛好家・足立潤氏と村上茂氏が篠山層群の泥岩層から肋骨・尾椎の化石を発見
9.27~29	ひとはく主体の試掘により10数点の化石を採集し竜脚類の化石と獣脚類の歯と推定
1.3	大型草食恐竜（竜脚類）の化石発見を記者発表
1.6~1.21	臨時展示「恐竜化石発見速報展」開催
1.15	丹波市が「丹波竜」を商標登録申請
2.15~3.21	第1次発掘（尾椎、血道弓等発見）
<2007 (平成19) 年度>	
4.12	ひとはく、県民局、丹波市三者協定の締結
4.14~4.30	臨時展示「恐竜化石発見速報展」開催（来館者 9,772人）
4.14~4.30	ひとはくがやってくる in 丹波「丹波市の恐竜化石速報展」（丹波市、山南住民センター）
4.22	恐竜化石を活かしたまちづくりシンポジウム開催（丹波市、やまなみホール）
5.1	丹波市恐竜化石保護条例施行
5.3~6.3	ミニ企画展「丹波の恐竜化石第1次発掘速報展」開催
5.3~5.6	展示協力「ゴールデンウィーク『恐竜フェスティバル』」（コモレ丹波の森、コモレ専門店）
6.26	丹波の恐竜化石の新知見として頭骨の一部が見つかった旨、記者発表
7.21	常設展示「丹波の恐竜化石」オープン
8.3~8.9	サマーキッズスクール化石展示（丹波市、丹波の森公園）
8.1~8.31	「篠山市立中央図書館・開館5周年記念事業『図書館に恐竜がやってくる』」（篠山市、篠山市立中央図書館）
8.7~9.2	展示協力「丹波竜センセーション」（ミント神戸、丹波市役所企画部）
8.19	丹波の恐竜化石発見1周年記念講演会
9.29	ひとはくミニキャラバン in 県政学会
10.1	任期付き研究員（古生物学）の採用
10.6~1.20	展示協力「恐竜王国へようこそ」（伊丹市子ども文化科学館）
10.18	県民局恐竜化石コーナー開設
12.1	恐竜ラボ山南ルーム（丹波電化工工房）オープン（丹波市、山南住民センター）
1.8~3.3	第2次発掘・ライブ中継（肋骨、環椎（首の骨）、未萌出の歯等発見）
3.12	クリーニングボランティア研修開始（丹波市）
<2008 (平成20) 年度>	
4.4	「丹波竜」商標登録
4.2	ひとはく恐竜ラボ開設
4.20~6.1	「丹波の恐竜化石第2次発掘速報展」開催
4.26~5.18	展示協力「特別展『ようこそ恐竜ラボへ！～化石の謎をときあかす～』」（大阪自然史博物館）
5.2~5.6	「ゴールデンウィーク『恐竜フェスティバル』」（コモレ丹波の森、（株）丹波の森ショッピングタウン）
5.3~5.5	丹波竜フェスティバル2008・シンポジウム開催
6.12	国内最古とみられるほ乳類化石等が篠山市で発見された旨、記者発表（足立潤氏が昨年秋に発見）
6.15~6.29	臨時展示「国内最古のほ乳類化石速報展」
6.27	篠山市脊椎動物化石保護条例施行
7.4~9.28	展示協力「夏期企画展『びっくり！どっきり！大化石展』」（島根県三瓶自然館）
7.20~8.31	丹波の恐竜化石 ～夏休み期間特別展示～
7.29	恐竜・ほ乳類化石等を活かしたまちづくりプロジェクトチーム設置
7.3	篠山市大山小学校の6年生が「獣脚類」の歯の化石を発見、記者発表
7.3	篠山川河川敷の一定区域について「篠山市脊椎動物化石保護条例」に基づく「重点保護区域」に指定

表 4-3 つづき

年月日	内 容
8.7~8.10	丹波竜サマーキッズスクール（丹波市、山南住民センター）
8.11~8.17	展示協力「恐竜化石特別展示会」（丹波市、山南住民センター）
8.20~8.31	化石発見市民フォーラム・化石一般公開（篠山市、篠山市民センター）
11.12	篠山市脊椎動物化石保護・活用委員会の設置
1.7~1.12	地球だい好き環境キャンペーン「自然のたからもの～丹波竜&コウノトリに会おう！～」（大丸神戸店9階特設会場）NHK神戸放送局主催
1.9~3.9	第3次発掘・ライブ中継（歯、肋骨等発見）
2.20~3.18	展示協力「見て、読む大恐竜展～失われた地球最大の生きものたち～」（兵庫県立図書館）
3.17	篠山市脊椎動物化石保護・活用委員会が篠山層群における「脊椎動物化石」及び「脊椎動物化石含有地」保護活用方策の中間報告を発表
3.25	恐竜・ほ乳類化石等を活かしたまちづくり推進方策検討報告書を作成
<2009 (平成21) 年度>	
4.5	化石発掘現場駐車場にモニュメント設置
4.1	米国科学雑誌「サイエンス」に丹波竜の発掘の様子が掲載
4.25~5.31	「丹波の恐竜を知ろう～3年間の発掘報告～」開催
4.25~5.10	「歴史に化石がやってくる！～第3幕 中生代 II～」（福岡歴史民俗資料館）
4.29~5.6	展示協力「ゴールデンウィーク『恐竜フェスティバル』」（コモレ丹波の森、（株）丹波の森ショッピングタウン）
5.2	丹波竜第3次発掘調査報告会・ボランティア顕彰式（丹波市、ゆめタウン）
5.2~5.3	恐竜キッズパーク（丹波市、ゆめタウン）
6.8~11.30	旧上久下村営上滝発電所改修工事開始
6.2	ティラノサウルス類の歯が発見された旨、記者発表（第3次発掘化石のクリーニング作業による）
7.18	丹波市で発見されたティラノサウルス類の歯（前顎歯）を展示
7.18~9.27	展示協力「恐竜2009～砂漠の奇跡」展（幕張メッセ・日本経済新聞社など主催）で丹波竜特別コーナー設置
7.19	元気村かみくげ拠点施設整備
8.1~8.31	「篠山市立中央図書館企画展『篠山に生きた古生物展』」（篠山市、篠山市立中央図書館）
10.24	県立丹波並木道中央公園で化石発掘体験コーナーを設置
10.17	ひとはくミニキャラバン in 陶芸美術館（兵庫県立陶芸美術館）
10.24~12.27	特別企画「竜と獣の道～太古の兵庫を歩いた生き物たち～」開催
11.1	ひとはくフェスティバル（恐竜フェスティバル）
11.26	篠山市内で原始的な角竜類の化石が発見された旨、記者発表
12.1	カエルの化石発見、記者発表
12.5~1.11	臨時展示「篠山の角竜と丹波のカエル化石」
1.9~3.5	第4次発掘・ライブ中継（歯、胴椎等発見）
1.29	恐竜・哺乳類化石等を活かしたまちづくり参画フォーラムの開催
2.11	丹波市旧上久下村営上滝発電所記念館竣工
2.26	たんば恐竜・哺乳類化石等を活かしたまちづくり推進協議会の設立
3.8	篠山層群における「脊椎動物化石」及び「脊椎動物化石含有地」保護・活用方策最終報告書 発表
3.12	「丹波竜～太古から未来へ」（神戸新聞総合出版センター）発行
3.20~5.30	展示協力「特別展『大恐竜展、知られざる南半球の支配者』」（大阪自然史博物館）
3.24	太古の生きもの市民研究所開設（篠山市）
<2010 (平成22) 年度>	
4.24~9.5	特別企画「丹波と恐竜を知ろう2010～第4次発掘報告～」開催
4.24	太古の生きもの展示室開設（篠山市、黒豆の館）
4.29~5.6	展示協力「ゴールデンウィーク『恐竜フェスティバル』」（コモレ丹波の森、（株）丹波の森ショッピングタウン）

表 4-3 つづき

年月日	内 容
5. 2	ひとはく、丹波県民局、篠山市、丹波市、(財)兵庫丹波の森協会、たんば恐竜・哺乳類化石を活かしたまちづくり推進協議会の6者による「篠山層群における恐竜、哺乳類化石等に関する基本協定」締結
6. 5	第4次発掘調査報告会・ボランティア顕彰式(丹波市、柏原公民館)
7. 17~8. 31	展示協力 「特別展『和歌山に恐竜がいたころ』」(和歌山県立博物館)
7. 29~11. 7	展示協力 「特別展『アジア、恐竜時代の幕開け — 巨大恐竜の進化 —』」(福井県立恐竜博物館)
8. 5	丹波市恐竜発掘におけるカエル類の全身骨格化石の発見、記者発表
8. 7	兵庫県立大学山南スタジオ開設
8. 7~9. 5	臨時展示「カエル類の全身骨格化石の発見」
10. 1	研究員(古爬虫両生類学)の採用
10. 2~4. 10	特別企画「化石大集合2010—過去に起こった生物大量絶滅事件—」開催
12. 4	新・丹波竜化石工房「ちーたんの館」オープン
12. 4	地才地創シンポジウム in 丹波「恐竜化石とこれからの地域づくり」(共催)の開催(丹波市、やまなみホール)
12. 5	「恐竜・子ども夢フォーラム」(共催)(丹波市、やまなみホール・山南住民センター)の開催
12. 11~2. 21	第5次発掘・ライブ中継
1. 7	篠山層群における曲竜類(鱧竜)の化石(歯)の発見、記者発表
1. 8~1. 10	臨時展示「小学生が発見した曲竜類(鱧竜)の歯化石」
3. 31	ひとはく恐竜・化石プロジェクト中間報告書の発行
< 2011 (平成23) 年度 >	
4. 23~9. 4	特別企画「丹波と恐竜を知らう2011 ~第5次発掘報告~」開催
6. 4	第5次発掘調査報告会・ボランティア顕彰式(丹波市、ちーたんの館)
7. 2~8. 28	展示協力 「特別展『来て!見て!感激!大化石展』」(大阪自然史博物館)
7. 15	県立丹波並木道中央公園で発見された恐竜化石(ディノニコサウリア類)、記者発表
7. 16~8. 21	展示協力 「特別展『目覚める!日本の恐竜たち!!』」(白石市立松任博物館)
7. 20~7. 31	県立丹波並木道中央公園における発掘調査
8. 20~8. 25	展示協力 「丹波竜の故郷展」(宝塚こどもみらい協議会、阪急逆瀬川アピアホール)
10. 2~4. 10	特別企画「化石集合2011—ジオパークを彩る化石—」
10. 8~1. 9	展示協力「科博コラボ・ミュージアムin茨城 第53回企画展 恐竜発掘—過去からよみがえる巨大動物—」(茨城県自然博物館)
10. 22	恐竜化石シンポジウム in たんば「恐竜の世界をよみがえらせる」の開催(篠山市、四季の森生涯学習センター)
10. 23	「恐竜の世界をよみがえらせる」サイエンス・カフェ&ワークショップの開催

表 4-4 ひとはくに訪れた行政関係相談者のべ人数の内訳

年度	相談者所属別内訳(人)				合計
	兵庫県	市町村	国	他府県	
2007	541	298	150	86	1,075
2008	435	337	195	121	1,088
2009	435	318	161	128	1,042
2010	444	510	86	52	1,092

員数をみる(図 4-8)と、兵庫県立大学は 88 名であり、神戸大学の 123 名に続き 2 番目に多くの委員を派遣し、3 位以下の大学を大きく引き離している。審議会等上級委員会においても 64 名と比較的多数の委員を派遣しており、県立大のプレゼンスは高い方であるといえる。また、県立大の中での内訳をみると、自然研の派遣数は 26 名と最も多く、貢献度が最も高いことがわかる。

受託事業件数

外部からの受託事業は、2003 年度の 10 件から 2007 年度には 21 件と倍増しており、2008 年以降は 16 件で推移している。内訳をみると、企業からの受託事業に増加傾向がみられ、CSR 活動の一環などで、生物多様性の保全に関心を持つ企業が増えていることがうかがえる。これから生物多様性に対する企業の関心はますます高まると見込まれ、企業からの受託件数は今後も伸びる余地があると考えられる。

(上田萌子)

兵庫県における外部資金の導入状況

近年、社会経済の回復力低下により、地方自治体の財政バランスは急速に悪化してきている。そのため、民間企業等との連携による新たな財源確保や民間企業のノウハウを取り入れた新たな県民サービスの提供など、公共サービスの提供における行政の関わり方の改革が求められている。そこで、ネーミングライツや PFI (Private Finance Initiative)、指定管理者制度などの外部資金導入が進められつつある。

公的機関における民間資金活用は、横浜市が平成 17 年 4 月 1 日に横浜市広告掲載要項を制定したことが先進的取り組みとして挙げられる。兵庫県では、ホームページ広告掲載要綱を平成 18 年 2 月 20 日に施行したほか、表 4-5 に挙げたような外部資金導入方策を実施している。

なお、ひとはくは独自の外部資金導入方策として、受託研究事業(第 1 号: フラワータウン自然環境調査(H10))やセミナー実行委員会設置(H13~)、ミュージアムフェスティバル実行委員会設置(H8~)などの取り組みを行っている。

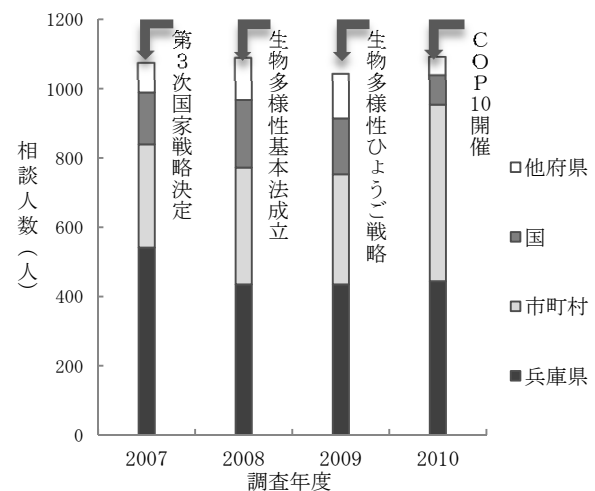


図 4-6 ひとはくに訪れた行政関係相談者のべ人数の推移と県内外における生物多様性関連の動向

また、平成9年には文部科学省科学研究費補助金取扱規定による研究機関の指定を受け、外部からの研究資金の獲得に努めている。(花輪美鶴、上田萌子)

(2) 市民団体・NPOの活動へのシンクタンク 地域研究員の登録件数

「地域研究員」は、個人の生涯学習・普及教育活動・生物多様性に関する活動をサポートすることを目的に、博物館と個人とが結ぶ協力協定制度で、地域研究員はひとくらのミッションである「地域を愛する心を育み、地域の自然・環境・文化を未来に継承する」を地域で実現するために不可欠な

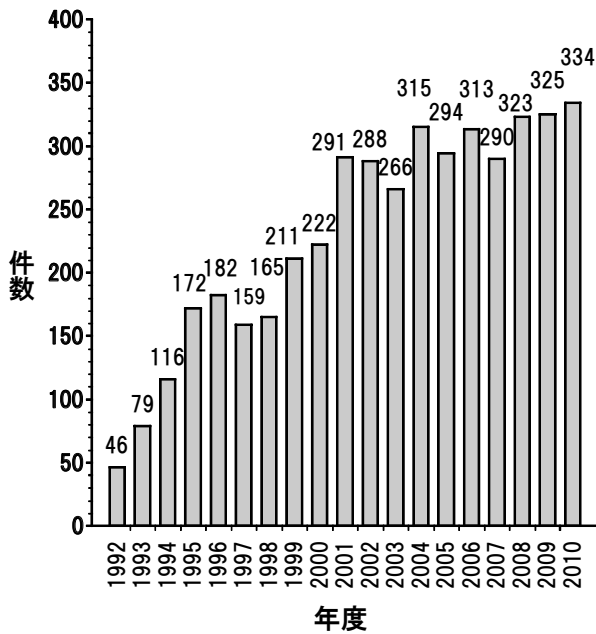


図 4-7 1992-2010 年度にかけての委員会への参画数

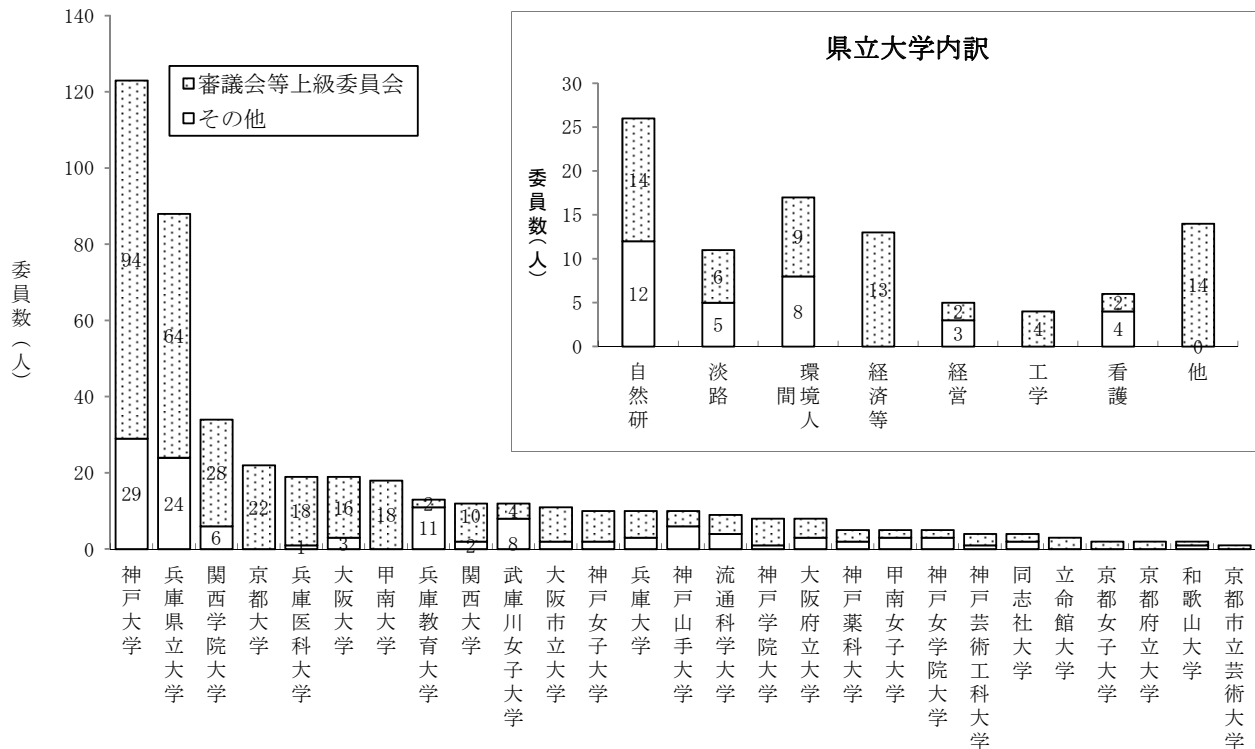


図 4-8 兵庫近隣の大学が県設置委員会に派遣した委員数 (2010 年度)

パートナーとなっている。2005 年度からの累計登録件数は徐々に増加し、2011 年度には約 50 名の地域研究員が登録され、各地で活躍している (図 4-9)。

連携活動グループの登録件数

「連携活動グループ」は、市民団体の普及教育活動・生物多様性に関する活動をサポートすることを目的に、博物館と市民グループとが結ぶ協力協定制度で、地域研究員と同様、連携活動グループもひとくらが掲げるミッションを共有し、地域でそれらを実現するためになくてはならない存在となっている。2004 年度からの累計登録団体数は増加しており、2010 年度には 23 のグループが活動している (図 4-10)。

共催・協力事業の実施件数

博物館は、共催事業や協力事業という形で、市民団体や他の社会教育施設、行政機関に対し、展示やセミナー、シンポジウムなどの計画への助言や展示物・備品等の貸出を行っている。2002 年以降の実績は、年によってばらつきがあるものの、2009 年からは年間 80 件程度で推移している (図 4-11)

2010 年度の連携先の内訳をみると、市民団体・NPO の割合が 44% と最も高く、社会教育施設 (22%)、行政・公益団体 (18%)、企業 (10%)、学術団体 (5%)、学校 (1%) が続く。博物館が、市民団体・NPO の活動に対して比較的多く支援を行っていることがわかる。(図 4-12)

博物館とつながりのある団体の県内分布

2010 年に博物館が編集・発行した「ひょうごのいきもの・ふるさとを見守るなかま」には、博物館とつながりを持ち、県下で生物多様性関連の活動を行う 141 団体が紹介されている。市民団体・NPO・学校団体を中心に、社会教育施設・

研究機関、企業など、多様な団体が活動を展開している。これらの団体の所在地および活動場所の分布（図 4-13）をみると、主に博物館の立地する三田周辺と阪神間に限られていた。なお、丹波市、篠山市、氷ノ山周辺（活動場所のみ）、豊岡市、姫路市に小さなクラスターが存在する。

また、自然環境の保全・再生の活動地点と生涯学習の活動地点に分けて分布をみると、両者の位置は類似しており、保全・再生活動と生涯学習の取り組みは、表裏一体であることがうかがえる（図 4-14）。なお、県下には主に但馬北西部、

但馬南部、北播磨、中播磨、淡路中部の 5 つの活動空白地域が存在し、博物館としては今後これらの地域で活動を展開していくことが課題である。

（上田萌子）

3) シンクタンクを支える資料収集活動

兵庫県立人と自然の博物館では、1992 年 10 月の開館以来、県内はもとより国内外の自然・環境に関する資料（動物、昆虫等、植物等、地学系及び環境系）について、購入、寄贈、館員による採集や交換などにより収集にあたってきた。

表 4-5 兵庫県における外部資金導入方策例

種類	施設名または事業名	概要
ネーミングライツ (平成23 年度実績)	明石公園「第一野球場」	○愛称：「明石トーカロ球場」 ○ネーミングライツ料（年間）：300 万円(消費税別途) ○契約期間：H23. 7. 1～ H28. 3. 31
	兵庫県立武道館第一道場	○愛称：「グローリー道場」 ○ネーミングライツ料（年間）：300 万円(消費税別途) ○契約期間：H23. 4. 1～ H26. 3. 31
	三木総合防災公園球技場	○愛称：兵庫県サッカー協会フットボールセンター ○ネーミングライツ料（年間）：500 万円(消費税別途) ○契約期間：H23. 4. 1～H24. 3. 31
PFI	尼崎の森中央緑地スポーツ健康増進施設整備事業	○期間：H15. 12～H35. 3
指定管理制度	兵庫県立海洋体育館	○指定管理者：財団法人兵庫県体育協会
	兵庫県立総合体育館	○指定管理者：兵庫県体育協会グループ 【代表団体】財団法人兵庫県体育協会 【構成団体】日本管財株式会社、株式会社コナミススポーツ&ライフ

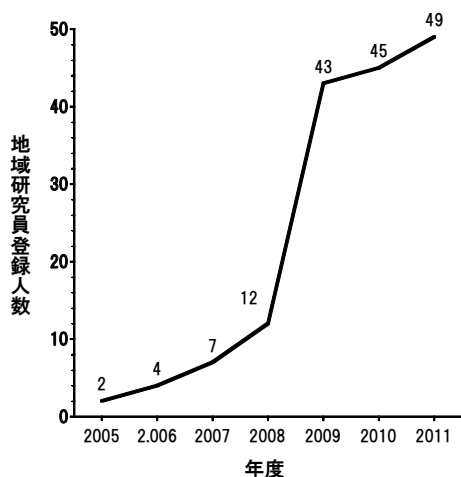


図 4-9 地域研究員の登録件数（累計）

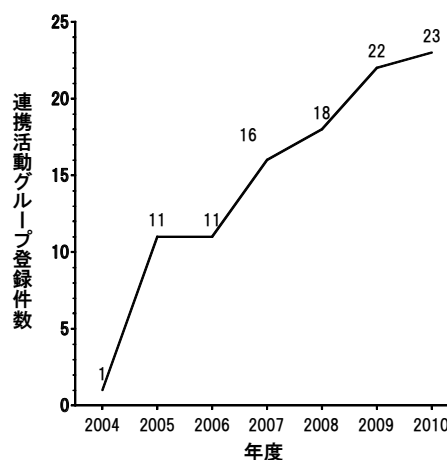


図 4-10 連携活動グループの登録件数（累計）

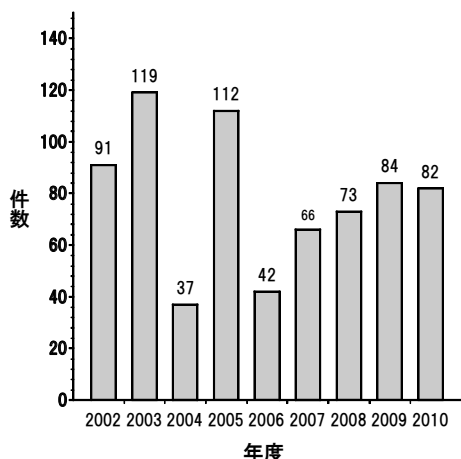


図 4-11 共催・協力事業の実施件数の推移

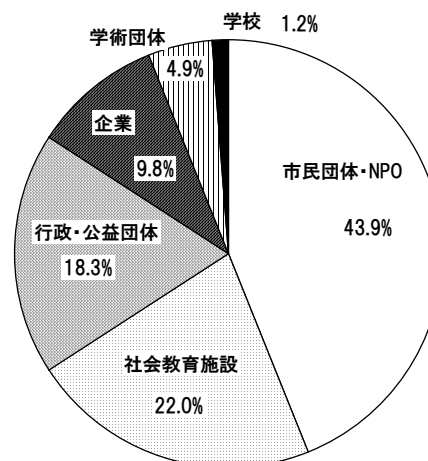


図 4-12 2010 年度共催・協力事業の連携先の内訳

これら収蔵資料の整理・保管及び収蔵資料データベースへの入力については、研究員等の館員が行っている。収蔵資料データベースは、共通の管理システムにより一元管理するため、開館当初から汎用計算機を導入して管理していたが、2003年3月からはクライアントサーバ型にシステムを更新し、館員一人一台にパソコン端末を配備する環境を実現した。これにより館内の端末から館員がデータ入力・検索を行い、収蔵資料データを共有することが可能になった。

さらに2009年3月からは収蔵資料データベースの情報を博物館ホームページから検索できるようにシステムを更新しており、県民等へのサービス向上を図っている。当博物館としても県民等が博物館ホームページや館内の情報端末から収蔵資料データを閲覧できるよう、収蔵資料の電子化を行うとともに、収蔵資料データベースへの登録を進めている。

なお、これまでに当博物館において収集を行った資料については、2010年度末時点の受入及び登録の状況を下表の通りまとめている。受入点数は全体で1,183,148点、登録点数は全体で540,629点である。

開館した1992年の年度末時点で198,122点であった登録点数の総数が、2010年度末時点で540,629点と約2.7倍に増加している。内訳は、動物が約3.5倍、昆虫等が約2.6倍、植物等が約3.1倍、地学系が約2.6倍、環境系が約1.5倍にそれぞれ増加している。

(山下正人)

表 4-6 資料の受入・登録件数一覧

【2010年度末資料受入状況】				
区分	購入	寄贈	その他	計
動物	562	29,341	5,295	35,198
昆虫等	432,437	269,044	99,506	800,987
植物等	5,254	164,448	114,906	284,608
地学系	1,235	12,723	39,162	53,120
環境系	4,861	1,057	3,317	9,235
合計	444,349	476,613	262,186	1,183,148

【2010年度末資料登録状況】				
区分	購入	寄贈	その他	計
動物	392	21,240	1,404	23,036
昆虫等	230,865	53,374	72,669	356,908
植物等	3,014	57,067	69,697	129,778
地学系	1,128	8,809	16,547	26,484
環境系	3,093	133	1,197	4,423
合計	238,492	140,623	161,514	540,629

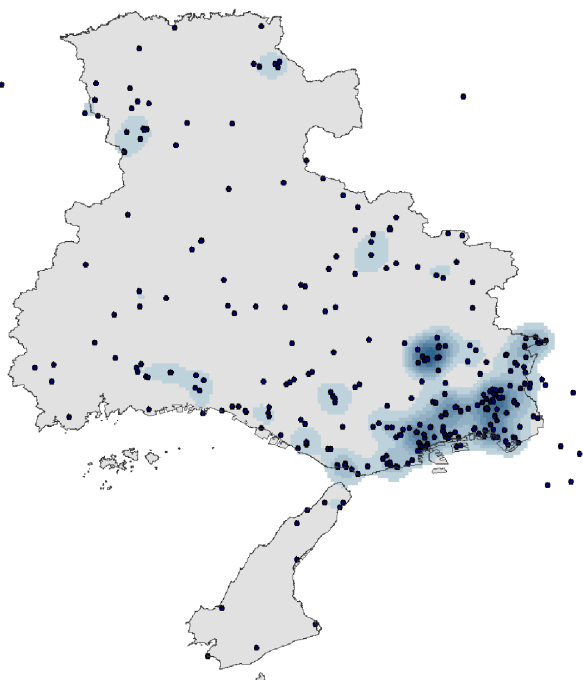


図 4-13 博物館とのつながりのある団体の所在地及び活動場所の分布

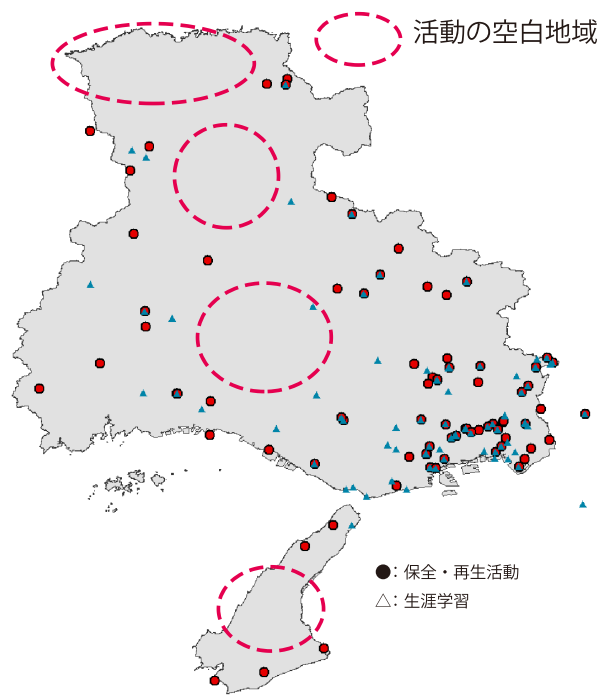


図 4-14 保全・再生および生涯学習の活動地点の分布